

現代英語に現れた小説に由来するメタファー(Ⅱ)

—「理想郷」Shangri-La と「逆境」Dickensian & Catch-22—

大西 博人

0. はじめに

人々によく知られている有名な小説は数多くあります。これらの小説のうち現代英語のなかに、その小説のタイトルや登場人物が現れるものがあります。通常、それらは比喩的に用いられています。

本稿では、米週刊情報誌や現代人気小説などの現代英語より筆者が収集してきた用例をもとに、小説にまつわる比喩表現、特に小説に由来するメタファーを取り上げます。ここで取り上げる小説は、その文学的評価ではなく、現代英語に現れる頻度の高いものを選んでいきます。

1. 「理想郷」のメタファー：Shangri-La

イギリスの作家ジェームズ・ヒルトン(James Hilton)は、小説『失われた地平線(*Lost Horizon*)』を1933年に出版しました。この小説の舞台は、ヒマラヤ山脈の西の果てを崑崙山脈のほうへ向かっていったところにある、チベットの未知の地となっています。カラカルという名の8,500メートルの高峰があり、そのふもとの霧の漂う調和に満ちた谷間に、Shangri-Laという僧院が建っています。そこに住む人々は普通の人々よりはるかに長生きし、老いる速さは非常に遅いのです。

この小説によりShangri-Laということばは有名になり、1930年代後半以後、ヒマラヤ奥地の神秘的な永遠の楽園、東洋の桃源郷などにも似た、外界から隔離された地上の楽園という意味をもつようになりました。

The management had, after all, opened the only new opera house in England since the first Glyndebourne theater was built 60 years ago. They had done it within their budget of \$50 million. Best of all, they had fulfilled their dream without taking a cent of public money.

But surely the most unusual aspect of this musical Shangri-La is the fact that it is set on private property. — *Time*, June 13, 1994, p.40

これはイングランド南部の町グラインドボーン(Glyndebourne)で60年ぶりに、新しいカントリーハウスの中にオペラ劇場がオープンしたことを伝える記事です。この新しい劇場は1,200人を収容でき、その音響設備は以前のものより優れていて、5千万ドルの予算額以内で完成できたのです。その上、その予算には公的資金は一銭も含まれていないのでした。このオペラ劇場建設のこのような理想的な内容を誇張し、ここでは「音楽の地上の楽園」と表現しているのです。(網掛部は筆者による。以下も同じ。)

The virtually carless avenues were wide and clean; the quaint neighborhoods, teeming with people and bicycles, were surprisingly harmonious; the Stalinesque edifices were grandly imposing. And, yes, there were no flies! To my impressionable mind, this was the socialist Shangri-La where people enjoyed collective bliss and equality, if not prosperity. — *Time*, May 13, 1996, p.30

これは北京についての報道です。通りは清潔でほとんど車は通っておらず、人々と自転車にぎわっている風変わりな趣のある住宅街は調和が取れていて、スターリン風の大建造物が堂々としていたと伝えていきます。

この記者の感じやすい心にとっては、北京は人々が集団として至福と平等を享受している「社会主義者の楽園」と映ったのでした。

A sports enthusiast, he is delighted by the city's athletic offerings — from minor-league

baseball to boxing matches to NASCAR races — but he also takes advantage of the casino shows. “My stomach was turning when I first came here — it was such a change,” says Capriotti. “But now I’m a happy camper. I call this my Shangri-La.” — *U.S. News & World Report*, June 11, 2001, p.55

スポーツマンの Capriotti は 56 歳で早期退職し、妻とネバダ州の小さな町に移り住みました。彼は街のスポーツ活動、マイナーリーグの野球、ボクシング、一般市販車カーレース (NASCAR: National Association for Stock Car Auto Racing) だけでなく、カジノのショーにまで参加したのです。

彼はキャンパー向きのこの町を「僕の理想の楽園」と呼んでいるのです。

For decades the kingdom of Bhutan has nurtured its image as the world’s last Shangri-La. Nestled in the Himalayas, it is a jewel of environmental preservation. Its pristine forests, sparkling, icy peaks and rare flora and fauna have caused the World Wildlife Fund to dub Bhutan “one of the ecological wonders of the world.”

— *Newsweek*, June 13, 1994, p.18

ブータン王国は何十年間にもわたり、「世界の最後の楽園」というイメージをはぐくんできたとする報道です。ここでは、ブータンの自然環境が、原典の Shangri-La に非常に近いことが表されています。

ブータンはヒマラヤ山脈に寄り添うように位置して、その原始林と輝き凍りつくような峰々と動植物相により、世界野生生物基金(WWF)によって「世界の生態学的不思議の一つ」と呼ばれているのです。

2. 「劣悪な社会環境」のメタファー：Dickensian

ディケンズ(Charles Dickens)はイギリスのヴィクトリア朝を代表する小説家で、主に下層階級を主人公とし、弱者の視点で社会を風刺した作品群を発表しました。彼の作品では『二都物語(1859)』、『クリスマス・キャロル(1843)』、『デイヴィッド・コパフィールド(1849-50)』などが日本人によく知られています。

当時の劣悪な社会状況をリアルに描いた小説に、1837年から1839年まで月刊誌に分載後、1838

年に刊行された『オリヴァー・ツイスト(*Oliver Twist*)』があります。この作品は、救済院で生まれてまもなく母親が死亡し孤児となった主人公オリヴァーが、救済院を抜け出した後も様々な困苦にもめげずに、純粋な心をもち続け立派に成長していくまでを描いています。同時に、彼は当時の救貧院の非人間的な状況を描き、改正されたばかりの新救貧法(1834年)の問題点を指摘し、当時の社会一般の非人間的な劣悪な生活状況も描いています。このようなことから、「劣悪な社会環境」を表すときに、“Dickensian”というメタファーが用いられるようになりました。

Just outside Leipzig’s jumble of medieval churches and high-rises lies one of the most dismal landscapes in Europe. This is the heart of the rust belt; mile after mile of blackened smokestacks spew sulfurous coal smoke into the yellow sky; workers labor in ramshackle chemical and textile plants under Dickensian conditions of dirt and noise.

— *Time*, November 27, 1989, p.23

これはベルリンの壁の崩壊直後の東ドイツのライプチヒの光景を形容したものです。何マイルにもわたり、黒い煙突が硫黄を含んだ石炭の煙を黄色い空に吐き出し、今にも崩れそうな化学や繊維工場の労働者たちは、粉塵と騒音の「ディケンズ的状況」のもとで働いている、と述べています。

メタファー Dickensian は、ここではディケンズの特定の小説を指すのではなく、彼の生きたイギリスのヴィクトリア朝時代の劣悪な前近代的な労働現場を指しています。

San Francisco, however, is shooting for \$11 an hour, nearly double California’s minimum wage of \$5.75 and the highest living wage in the nation. The proposal, originally set at \$14.50 an hour, has divided the city. Critics claim the hike would reduce job opportunities by bankrupting small businesses. Advocates argue that without the increase, San Francisco will become a Dickensian world of haves and have-nots. — *U.S. News & World Report*, November 1, 1999, p.44

これはサンフランシスコ市の最低賃金法の導入についての、反対派と推進派の言い分を伝える報道です。反対派は、時給 11 ドルは高すぎて零細企業を破産に追いやり職を減らすだろうと言い、推進派はその程度の時給の値上げなしでは、サンフランシスコは「もてる者ともたざる者の格差の激しいディケンズの小説の世界」となるだろうと主張しているのです。

Pell tried to adopt an attitude of patience. "In capital cases, virtually every *habeas corpus* petitioner portrays his childhood as a Dickensian nightmare. But that doesn't go to retardation. Both the California Supreme Court and Judge Bond found the evidence of retardation less than persuasive —." — Richard North Patterson, *Conviction*, Ballantine Books 2005, p.437

これは Pell 検事が、15 年服役している知的障害者の死刑囚の再審請求に反対する意見を述べている場面です。極刑での人身保護令状を盾に取る再審請求者のほとんどすべては、子ども時代を "a Dickensian nightmare" 「ディケンズの悪夢」として語ります。しかし、カリフォルニアの最高裁とボンド判事が示したように、知的障害は再審請求の根拠としては説得力がない、と彼は述べているのです。

ここでの「ディケンズの悪夢」は、『オリヴァー・ツイスト』の不運な子ども時代を連想させます。

Baiul seems to thrive on this shifting ground. Still an unknown junior in '92, she did not even go to Albertville. Then she suddenly flowered at the '93 world championship in Prague, which she won with a display of timeless charm, and guts. Her story was Dickensian — abandoned at age 2 by her father, orphaned at 13 by the death of her mother, a world champion at 15.

— *Newsweek*, February 14, 1994, p. 36

これはウクライナの女子フィギュアスケート選手バイウルの生い立ちについての記述です。彼女は 2 歳で父に捨てられ、13 歳で母親の死で孤児となり、15 歳で世界ジュニアチャンピオンとなったのです。

ここでは明らかに Dickensian は、孤児オリヴァーの苦難の子ども時代を含意しています。オリヴァーは、苦勞の末、ふとしたことがきっかけで紳士ブラウンローに保護され、幸せに暮らすことになったのですが、15 歳でジュニアチャンピオンとなり、1993 年のプラハ世界選手権で優勝したバイウル選手と共通点があるため、このメタファーが用いられたと思われます。

3. 「八方ふさがり」のメタファー：Catch-22

ジョセフ・ヘラー(Joseph Heller)は、1923 年 5 月 1 日に生まれ、ニューヨークのブルックリンで育ち、幼いころから作家を志していました。彼は第二次世界大戦の間、アメリカ空軍に従軍シタリアで爆撃機の爆撃手として 60 回出撃し、1945 年の除隊後、ニューヨーク大学で英語を専攻し、1949 年コロンビア大学で修士号を取得しました。フルブライト奨学生としてオックスフォード大学で研究した後、ペンシルベニア州立大学の英語の教授(1950-52)となりました。その後、広告コピーライターやある会社の販売促進部長の仕事(1952-61)もしました。

最初の小説『キャッチ-22(Catch-22, 1961)』が話題作となり、彼は小説家として世に知られるようになったのです。彼は 1970 年から 1998 年までの間に 7 つの小説を発表しましたが、いずれも処女作ほどの成功を収めることはできず、1999 年 12 月、心臓発作により 76 歳でこの世を去りました。

この小説では、アメリカ空軍の爆撃手である主人公 Joseph Yossarian が除隊を決意するのですが、「除隊は正気でなくなるとできるが、除隊を申し出ることができる者は正気とみなす」という彼の願望を不可能にする軍の掟があったのです。つまり、ヨサリアンが除隊を申し出れば、正気であるとみなされ除隊できないのです。ヘラーはこのようなどうにもならない状況を Catch-22 で表したのです。

この小説のタイトル "Catch-22" は、メタファーとして現代英語に頻繁に現れています。

A commercial air-freight service, she says, would give a huge boost to the growing number of Afghan traders who want to export. It's a classic catch-22: freight companies shy away from

Afghanistan because it's so unstable, but stability will come only when Afghanistan's economy improves, which will require more investment, such as freight services. — *Time*, December 17, 2007, p.64

これは元米公共ラジオ放送局のある女性記者のアフガニスタンの現状についての意見です。民間機による貨物輸送がアフガニスタンの輸出業者に勢いを与えるのですが、貨物会社は治安が不安定だという理由でアフガニスタンを避けているのです。しかし、アフガニスタンの経済が改善して初めて、貨物輸送のような投資が増え、治安が安定するのです。

アフガニスタンの経済の改善には、民間航空貨物輸送が必要なのですが、治安が不安定なため実現せず、経済がよくなれば治安も安定するという苦境を catch-22 で表しています。

These are baby steps. But Megumi Suto, a professor at Waseda University's Graduate School of Finance, says Japanese are not born risk avoiders. They are held back by the lack of information (in Japanese) about foreign investments. Foreign companies rarely publish results in Japanese. Foreign brokerages don't offer services in Japanese. It's a Catch-22: Japanese can't invest without information, which foreign multinationals won't provide until many Japanese invest. — *Newsweek*, May 2, 2005, p.42

ここでは、早稲田大学大学院のある女性教授が日本人の投資に対する態度を述べています。彼女によれば、日本人は生まれつきリスクを避ける国民ではなく、外国の投資会社や証券会社は日本語による情報をほとんど出してくれないので、海外投資に消極的なのです。日本人は情報なしには投資ができないし、外国の多国籍投資会社は、多くの日本人が投資するまで情報を出さないのです。彼女は日本人による海外投資は、身動きができない二重の苦境にあると述べています。

Stealing a painting, it seems, is sometimes easier than robbing a bank. Many museums have small security budgets and spend more money on acquiring new art than on

securing it. Then there is the Catch-22 of putting art on display: If the public has access to the paintings, so do the thieves. When two masked thieves sauntered into the Munch Museum in Oslo in August 2004, they did so in broad daylight. — *U.S. News & World Report*, October 10, 2005, p.43

多くの美術館は警備の予算を少なくし、新たな作品を獲得することにより多くのお金を費やしています。そのため作品を盗むことは、時として銀行の金を盗むことよりずっとやさしいのです。美術品を展示することには「八方ふさがりの状況」が伴うのです。つまり、美術品を展示すると、一般の人々だけでなく美術品泥棒にも開かれた状態になるのです。一方、警備を強化して展示を制限すると、美術館の役割が不十分となるのです。オスロのムンク美術館の盗難を例にとり、このメタファーはこのようなジレンマを表しています。

"But then, these are the questions I ask myself. Why didn't I *make* him get help? Why didn't I intervene? I keep asking myself whether there was something I could have done that would have changed things. Stratton's supposed to have all these great mental health programs, but suddenly he wasn't eligible for them anymore — that's a real Catch-22, isn't it? Because of a mental illness, you quit and lose your right to treatment for your mental illness. That isn't right." — Joseph Finder, *Company Man*, St. Martin's Paperbacks 2006, p.386

これは友人であるストラットンの病気に対して何もできなかった女性が、そのことを後悔して、別の友人に打ち明け話をしているところです。ストラットンは会社の充実した精神衛生プログラムを享受できるはずだったのに、すでに精神的な病気だと判明していたために職を失い、そのプログラムを受ける資格がなくなったのです。彼女はこんなことは「まさに八方ふさがりの地獄」だと述べているのです。この場合、陥った苦境が精神的な病気に関することから、原作の小説の状況に近いものがあります。

このようにメタファー Catch-22 は、A, B どちらの相反する状況にも解決策を見いだせない苦境に

陥る様を表現しています。このような事態を詳しく説明しなくても、この1語は読者に原作のイメージを呼び起こさせ、抽象的な状況の理解を容易にしているのです。

4. 英語読解力と「文化常識(Cultural Literacy)」

本稿では小説にまつわるメタファーを取り上げました。このようなメタファーを肌で読み取るためには、そのメタファーが由来する小説の知識が必要になります。このような知識は文化的な教養ということになります。

米ヴァージニア大学の英文学の教授 E. D. ハーシュ(E. D. Hirsch)は「読み書きの能力(literacy)」を培うのには、単なる言語形式、たとえば語彙、文法、慣用句、綴り、構成原理などを教えるだけでは十分でなく、文化的情報も教えなければならないと主張しました。すなわち真の読解力の習得は読み書きの技術のみならず、読み手がテキストに書き表されていない側面、つまり書き手の属する文化範疇を知ってこそ可能だという主張です。

ハーシュは、この知識を言い表すのに1983年に初めて“cultural literacy”(文化的読み書き能力)という言葉を用いました。彼は1987年、*Cultural Literacy*を著し、アメリカの学校教育のなかで文化的な識字能力を高めることがいかに重要であるかを主張し、その最終章で標準的なアメリカ人が当然知らなければならない固有名詞、慣用句、日付そして概念などを含む5,000項目の用語リストを作成しました。リストには、第1に世界的に共通な科学、世界史、美術、文学、などの分野にわたる用語、第2に英語圏共通の慣用句など、そして第3には米国固有の史実や価値観などにおよぶ文化的用語が含まれています。

1993年には、ハーシュは前著を辞典の形に発展させ、教えるべき多くの項目を文化記号の形で共同研究者と *The Dictionary of Cultural Literacy* を著しました。この辞書は文化常識を詳しく23の分野に分け、250以上の地図、図、写真などを盛り込み、最後に索引を示し、学校での教科書としての使用を考慮したハードカバーの大作となっています。

本稿で取り上げた3つのメタファーに関する記述は、すべてこの辞典に掲載されており、以下のように記されています。

Shangri-La : A fictional land of peace and perpetual youth; the setting of the book *Lost Horizon*, a NOVEL from the 1930s by the English author James Hilton, but probably best known from the movie version. Shangri-La is supposedly in the mountains of TIBET.

Oliver Twist : A NOVEL by Charles DICKENS; the title CHARACTER is an orphan boy. In one famous scene, Oliver is severely punished for asking for more gruel, or porridge (“Please, sir, I want some more”). Oliver later becomes a pickpocket in a gang of young thieves led by FAGIN. Violent in PLOT, the book exposes the inadequacies of British public institutions for dealing with the poverty of children like Oliver. Oliver is eventually taken into a wealthy household and educated.

Catch-22 : A war NOVEL from the 1960s by the American author Joseph Heller. “Catch-22” is a provision in army regulations; it stipulates that a soldier’s request to be relieved from active duty can be accepted only if he is mentally unfit to fight. Any soldier, however, who has the sense to ask to be spared the horrors of war is obviously mentally sound, and therefore must stay to fight.

参考文献

- 野町二 / 新井良雄(1968)『立体 イギリス文学』朝日出版社
 中島齊 / 松本唯史 / 田島俊雄(1968)『立体 アメリカ文学』朝日出版社
 Hirsch, Jr., E. D. (1987) *Cultural Literacy*, (Boston: Houghton Mifflin Company)
 Hirsch, Jr., E. D., Joseph F. Kett, and James Trefil, eds. (1993) *The Dictionary of Cultural Literacy*, (Boston: Houghton Mifflin Company)